

没後 400 年

えちぜんやすつぐ

名刀工 越前康継

- 会場 1階 松平家史料展示室
- 会期 令和3年11月27日(土)～
令和4年1月11日(火)
- 休館日 12月13日(月)、
12月28日(火)～1月4日(火)

江戸時代前期、越前は全国有数の刀剣の産地としてその名を知られ、多くの刀工（刀鍛冶）が福井城下及びその周辺で刀を鍛えました。その中でも最大の刀工集団が、戦国時代末期に近江国から越前に移住したとされる「下坂派」で、その代表的存在が初代康継です。

刀工は通常、刀に刻まれた銘からその名を知ることはできても、その履歴を詳しく知る手掛かりはあまりないのですが、康継は天下人・徳川家康に見出されたことで、歴史の表舞台的一幕にその姿を見せています。

今年がその初代康継没後400年の節目となることから、今回は当館収蔵ならびに県内個人所蔵の歴代康継の作品や、ゆかりの歴史資料などから、その足跡をたどります。

「康継」の名の由来

初代康継は通称を下坂市左衛門と名乗ったといい、近江国坂田郡下坂郷（現在の滋賀県長浜市）で活動していた「下坂鍛冶」という刀工集団の中心的存在であったとみられています。この下坂鍛冶は戦国時代末期、越前に移住してきました。関ヶ原の戦いでの功績により越前一国を拝領した結城秀康（徳川家康の次男、初代福井藩主）が福井城（当時の呼称は北庄城）とその城下町の建設を進めていた慶長10年（1605）頃には、大規模な刀工集団「下坂派」が成立していたと考えられます。下坂派には康継を中心として、近江国から来た下坂鍛冶のほか、美濃国（現在の岐阜県南部）から一乗谷に移住していた「越前関」と呼ばれる刀工たちなどが合流しました。

初代康継本人が熱田神宮（現・愛知県名古屋市）に奉納した刀（重要文化財）で「奉納尾州熱田大明神／両御所様被召出於武州江戸御剣作御紋康之字被下罷上刻籠越前康継」と銘を刻んだものが遺っています。すなわち初代康継が両御所様（徳川家康と二代将軍・徳川秀忠）に江戸に招請され、刀を鍛えた際に徳川家の家紋である葵紋と家康の「康」の字を拝領し、その後熱田神宮に参り奉納した刀であるという意と思われます。

この刀には制作年が刻まれていないため、正確な時期は不明ですが、慶長年間のある時期に家康から直に「康」の字と葵紋を刀に刻むことを許され、康継と名乗るようになったことが分かります。

この職人としては破格ともいえる待遇の背景には、初代康継個人の技量のみならず、康継が率いた刀工集団・下坂派が当時、大坂の陣を前にした徳川家の大量の刀剣需要に応える貴重な存在であったことがあるのではないかと考えられます。



「康継」を名乗る前の作と考えられる脇指の銘
(脇指 銘 越前国下坂 (個人蔵))



「康継」を名乗って間もない頃の作と考えられる脇指の銘
(脇指 銘 於武州江戸越前康継 (個人蔵 当館寄託))

大坂夏の陣、古名刀の再生と創造

初代康継が刀工として歴史の表舞台に姿を現すのは、豊臣氏が滅亡した大戦「大坂夏の陣」の後です。慶長20年(1615)5月8日に大坂城が炎上して落城した直後、同年閏6月16日に、康継は京の二条城において、家康から大坂城中に秘蔵されていたであろう、豊臣秀吉が集めた名刀の搜索と「再造」を命じられました(『駿府記』)。大坂城からは多くの名刀が焼け身(火災の熱をうけて刀の刃文が消えてしまった状態)となって見つかり、康継はこれらの再刃(再び焼き入れをして新しい刃文をつける)を手掛けました。名物「鯨尾藤四郎」、「一期一振」、「海老名小鍛冶」など、名だたる古の名刀が康継によって再生され現在に伝えられています。

康継はこれら名刀の再刃のほか、名刀の「写し」を数多く制作し、「写し物の名手」としても知られました。康継の「写し物」は単なる複製ではなく、オリジナルの名刀に範をとりながら、自身の造形感覚でその姿や刃文・刀身彫刻をアレンジしたものが多く遺されており、彼の非凡さを今に伝えています。

【写真左】大坂の陣で焼け身となった名刀「獅子貞宗」の写し
(脇指 銘(葵紋)以南蛮鉄康継末世剣是也/本多飛騨守成重所持内(立葵紋) 個人蔵)

【写真右】当時徳川将軍家所蔵の名刀「安宅貞宗(あたきさだむね)」の写し
(刀 無銘(初代康継) 個人蔵 当館寄託)



その後の「康継」たち

徳川家康にちなんだ「康継」の名は、初代以降も代々受け継がれることとなります。初代の子、康悦も二代康継を名乗り、初代に劣らない技量で名作を多く遺しています。

二代康継没後、その嫡子が幼かったこともあり、二代目の弟との間で三代目継承をめぐる紛争が起きますが、福井藩の重臣や幕府の役人たちの仲介によって、江戸と越前に2つの下坂家が分立し、それぞれ将軍家お抱え、福井藩お抱えの刀工として「康継」を名乗り存続することになります。刀剣需要の衰退もあり、四代目以降の作は現存数も少なくあまり注目されませんが、越前・江戸の両家とも、幕末まで刀工の名門として存続し、刀のほか鐺などでも趣深い作を遺しています。



【写真左】
二代康継による獅子貞宗の写し
(脇指 銘(葵紋)以南蛮鉄越前康継 個人蔵)



【写真上】江戸下坂家八代目康継作 左右扇形透かし鐺
(鐺 銘 清水谷於方竹窓下/八代目康継作 個人蔵)

次回の展示

企画展

福井藩の医療～家業、医学所、種痘～

1月15日(土)～2月27日(日)

展示解説シート No.145 令和3年11月27日発行
福井市立郷土歴史博物館 〒910-0004 福井市宝永3-12-1
電話 0776-21-0489 Fax 0776-21-1489
担当：松村知也 印刷/宮本印刷